優駿

下巻

宮本輝

新潮社

優駿

下巻

宮本輝

新潮社

ISBN4-10-332505-4　C0093
© Teru Miyamoto, 1986, Printed in Japan

優駿（ゆうしゅん）　下巻

一九八六年一〇月二五日　発行
一九八八年　九月二五日　二四刷

定価　一二〇〇円

著者　宮本輝（みやもとてる）

発行者　佐藤亮一

発行所　株式会社新潮社
東京都新宿区矢来町七一
電話　業務部(03)二六六—五一一一
編集部(03)二六六—五四一一
郵便番号一六二
振替東京四—八〇八

印刷所　東洋印刷株式会社

製本所　加藤製本株式会社

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

第六章　翡翠色の道　5
第七章　鎖の輪　63
第八章　冬の鳥　116
第九章　春雷　169
第十章　黒い風　223
終章　長い流れ　276
あとがき　328

装画　塩田みはる

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

優駿

下巻

第六章　翡翠色の道

一

「オラシオン号」と印された名札の掛かっている馬房の、丸い柵に凭れて、渡海博正はもう一時間以上も小声で話しつづけていた。明け三歳馬となり、あと一週間か二週間かたてばいよいよ牧場から厩舎へと旅立っていくオラシオンは、からっぽの飼葉桶を舐めたり、博正のシャツの衿を前歯で噛みついて引っ張ったりした。大きな瞳の中に、瑠璃の玉を隠しているようなオラシオンの目が、博正の表情を見ていた。

「お前、ものすごく運がいいんだよ」

もう何回繰り返したか知れぬ言葉を、博正は、すでに五百キロ近くあるのではないかと推定されるまでに成長したオラシオンに言った。

「うちの牧場にいたら、こんな立派な体になれたかどうか判らねェもんな。どの牧場も、よその牧場の馬を預かるのはいやがるんだ。怪我をしたり、病気にかかったりしたら、やっぱりいやなもんだよ。いくらそれを承知で預かってやったから責任はないっていったって、そうはいかなくなるもんな」

五月末の北海道の風はまだ冷たく、馬房の通路を吹き抜ける寒風が、博正の耳を痛くさせた。博

正は自分の口元に鼻面をすりつけてきたオラシオンの顎の下を撫でてやった。
「それも、そんじょそこいらの牧場じゃねェんだぞ。吉永ファームなんだぜ。日本一の牧場なんだぜ。うちの牧場の何十倍もあって、何種類もの牧草がたらふく食えて、思いっきり走り廻れて……。この牧場を見たら、うちなんか恥しくって牧場なんて言えやしねェ。痩せた草の生えてる幼稚園の遊び場みてェなもんだよ。お前は、ものすごく運がいいんだ」
「いい馬体だ。この牧場の三歳馬の中じゃあ一番ケンカが強い。居候のくせして、三歳馬の中ではボス格だよ」
突然、背後で声がしたので、博正は驚いて振り返った。吉永ファームの会長である吉永達也が、黒いテンガロン・ハットをかぶって立っていた。博正は、一年のうちの半分近くをアメリカやヨーロッパで仕事をしている吉永達也とは滅多に顔を合わしたことがなかった。帰国して、自分の牧場を訪れた吉永に、一、二度挨拶しただけである。博正は緊張して、すぐに言葉が出てこなかった。
「こんな素晴らしい牧場に預かっていただいて、本当に感謝しています」
彼は深く頭を下げた。
「馬主さんからちゃんと代金を貰ってるから、あんたがそんなに遠慮することはないよ」
吉永は微笑み、大声で牧童を呼んだ。若い牧童が走って来た。
「どうして牧場に放さないで、馬房に入れとくんだ」
吉永にきつい口調で言われて、牧童は困惑した顔つきを博正に向け、
「渡海さんが、ずっと馬と話をしてたもんですから……」
と答えた。
「話は済んだの？」

「……はい」
「この三日間雨だったからねェ。きょうみたいに風が強くて天気のいい日は、馬のためにはおあつらえむきだ。光と風は、どんなビタミン剤よりも体にいい。人間もおんなじだよ」
オラシオンは馬房から出され、三歳馬の牡が放牧されている広い囲いの中に連れて行かれた。
「すみません。もうすぐ入厩するって聞いたもんですから、いろいろ話をしときたくって」
吉永は、しばらくじっと博正の顔に見入っていたが、やがて笑顔を浮かべて言った。
「馬に話をするのも大切だよ。私も若い頃、ある人から教えられたことがある。馬と話をしろ。何でもいいから話しかけろ。自分の女房の悪口でもいいし、あいうえお、かきくけこ、を何遍も何遍も繰り返すだけでもいい。歌をうたって聞かせたっていいんだ。とにかく話しかけてやれってね」
吉永は、言い終えると、「ふん」と小さく笑った。それは相手を侮蔑してのそれではなく、言葉の末尾につけ足す彼の癖らしかった。いったん行きかけて立ち停まり、吉永はまた博正を見つめた。
「この牧場、隅から隅まで見たことはあるかい」
「いいえ」
「じゃあ、見せてあげよう。来なさいよ」
突然の思いがけぬ誘いに博正はとまどったが、吉永はさっさと厩舎を出て車に乗り込んでしまった。渡海博正にとっては、吉永達也といえば雲上人のような存在であった。日本一どころか、世界の名だたる牧場と比肩しても劣らぬほどの規模と設備を誇る吉永ファームを作りあげ、サラブレッドの鑑定師としても、配合師としても、タツヤ・ヨシナガの名はアメリカでもヨーロッパでも知れ渡っているのである。その吉永が、自分で車を運転して牧場を案内してくれようとしている。博正は身を固くし、車の助手席に坐り、

「お忙しいんじゃありませんか？」
と訊いた。
「三時に関東から調教師が来るけど、それまでは暇だよ」
車は牧場の事務所の前に出、柵と柵に挟まれた土の道をゆっくり進んだ。生まれたばかりの仔馬が母馬の乳を吸っていた。吉永は車を停め、その仔馬を指差して、
「こいつは、モナリザの初子だよ。父はセントエストレラだ。モナリザは三十七戦して八勝をあげた。重賞レースに三回勝った」
と説明した。乳首にむしゃぶりついていた仔馬は、近くに停まった車を物珍しげに眺めた。風が、短かいたてがみと毛糸のまばらな束みたいなしっぽを真横になびかせていた。
「モナリザとセントエストレラとの配合は、母系を考えただけでも、たぶん超一流のものだと思ってね。それも世界の市場に出しても超一流のね。それで五年前から毎年モナリザにセントエストレラをかけてきたんだけど、どうしても受胎しなかったんだ。惜しいけど、モナリザはもう肌馬としてはあきらめるしかないなと思った。でもどうしてもあきらめきれなくて、去年これが最後だっていう種付けをしたんだ。そしたらやっとついた。一週間前に生まれたから遅生まれで、モナリザも体は小さかった。そのうえ初仔だから、こいつもそんなに大きくはならんだろうけど、セントエストレラってのは恐しい種馬だ。どんな競走馬に育つか楽しみにしてるんだよ」
セントエストレラの子供たちは、この二、三年で日本の競馬界を席捲し、種牡馬の勢力図を完全に塗り替えてしまったと言っても過言ではなかった。実際に、セントエストレラは去年のリーディング・サイアーの一位となり、二位のクロスリバーや三位のウラジミールに、獲得賞金でも勝鞍の数でも大きく水をあけてしまったのだった。――セントエストレラってのは恐しい種馬だ――。吉

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

永の言葉には、自負や驕慢だけではなく、自分の所有する一頭の種馬の底知れぬ力への畏敬の念が如実に含まれていたように博正には感じられた。吉永は延々と伸びている柵に沿って車を走らせた。やがて車は森に入った。なだらかな坂道は、どこまでもつづく樹木のトンネルの中を縫っていた。

「冬でも、ここだけ雪が積らないんだ」

吉永は頭上の密生した樹々を見あげてつぶやき、

「葉が落ちても、枝が雪をさえぎるんだな。ここから出たら雪道だ。トンネルを抜けると雪国だったって書いた小説家がいたな。当たり前だよ。トンネルの中は、雪は降らないもんな」

そう言って、また「ふん」と笑った。そんな解釈の仕方は、吉永達也が馬以外のことはまったく念頭にないという事実を代弁しているようにも取れるし、逆にちゃんと何もかも判って、わざと茶化しているようにも取れるので、博正は自分の教えてもらいたがっていることを、案外損得抜きに、親切に教示してくれるかもしれないと考えた。彼は思い切って、吉永達也に訊いた。

「うちみたいなちっぽけな牧場が、ほんのちょっとでも吉永さんの牧場に近づけるようにするには、まず何から手を下したらいいでしょうか」

口にしてしまってから、博正は恥しさで体が熱くなった。何と身のほど知らずの質問をしてしまったことだろう。自分の牧場には十二頭しか肌馬はいない。放牧地は十二町歩で採草地は八町歩なのだ。肌馬として一流どころで通用するのはハナカゲ一頭だけではないか。サラブレッドの生産だけで生活をするための最低限の規模を、やっと維持している現状なのだから。

吉永は森を抜けたところで車を停め、牧草の一種であるオーチャードが、吹く風に撫でられ、あちこちで立ったり傾いたりして、そのたびに緑の濃淡をめまぐるしく変化させている広大な採草場の中に入って行った。博正も車から降り、吉永のあとを追った。採草場に足を踏み入れたとき、彼

は浜辺から寄せ来る波に向かって進んでいるような錯覚にひたった。博正にとって、そこはオーチャードの採草場ではなく、果てしない遠浅の海だったのである。テンガロン・ハットを手で押さえ、吉永達也は、

「日本の農地法を変えなきゃ、どうしようもないよ」

と言った。

「うちの牧場は、放牧地が十二町歩で、採草地が八町歩です。採草地にはチモシーを八割、レッドクローバーを二割植えてあります。それから放牧地にホワイトクローバーとチモシーを混ぜて……」

博正の言葉をさえぎって、吉永は充分に生育したオーチャードの一本を抜き取り、こう言った。

「競走馬は遊びに使うものだから、そのために使う土地は農地法の適用外だってのが、お役人の理屈だよ。牛を飼うんなら、土地は農地法で認められて拡げられる」

「まず土地を拡げろってことでしょうか」

「馬の良し悪しは、血統は別にして、環境で変わるんだよ。環境だよ。どんな上等の栄養剤を使ったって駄目なんだ。馬は草食動物なんだぜ。いい草を食わせて、出来るだけ長い時間放牧しといてやるんだ。放牧地には、絶対にケンタッキー・ブルーグラスが必要だな。いい草を作るにはいい土地が要るよ」

「でも、農地法を変えるなんて、僕にはとても不可能なことですよ」

「だから、牛を飼ったらいいじゃないか」

吉永は、ふんと笑った。そして急に話題を変えた。

「あんたの親父さんも、まずいことをやったもんだ。砂田から、あのオラシオンの手付金を貰って

たそうだな。そのあとで和具さんに売った。砂田はあとには引かんだろう。増矢もあの馬を欲しがってる。だから私の牧場に預かってくれって頼んできたんだ」

博正が、砂田重兵衛から父が手付金を受け取っていたということを知ったのは、去年の五月であった。増矢調教師と和具平八郎がトカイファームを訪れた日から一年もたっていた。博正はそれを知ったとき、父をなじった。この世界では、口約束は正式な契約書をかわしたのと同じだったし、しかも手付金を受け取ったとなれば、無断で別の人間に売ったりしたらサギ行為とみなされて当然だったのである。

「砂田先生が来て、クロを買いたいって言ったとき、親父は二歳のセリまで売れないだろって思ってたもんで、一も二もなく飛びついちまったんです。増矢先生から電話がかかってきたのはそれからちょっとあとで、親父はせっかくだけど、砂田先生と約束が出来ちまったって断わったんですよ。そしたら、増矢先生が、幾らで売ったんだって訊いたそうです。千五百万円だって答えたら、増矢先生は、それなら和具社長に値を訊かれたときに三千万円なら売ると言え。一割の手付金を倍にして砂田に返しても、まだ千二百万円儲かる勘定だ。砂田が文句を言って来たら、俺とあいつとのあいだでケリをつけるから。増矢先生は親父にそうたきつけたんだそうです。それで」

博正は慌てて口を閉ざした。けれども、増矢調教師に対する反発心がいったんは喉元で止めた言葉を結局吐き出させた。

「それで、和具さんから金が振り込まれてすぐに、増矢先生が電話をかけてきて、差額の千二百万円のうちの半分を俺の手数料としてよこせって言いました。それでも砂田に売るよりも六百万円儲かるだろう。手数料と、あとで砂田とひと悶着起きたときの調停料だ。親父は増矢先生に六百万円払いました。増矢先生は、絶対にこの件は和具社長には内緒だぞって、何度も念を押したそうで

す」
　オーチャードの葉が眩い陽光に照らされて、跳びはねる夥しい小魚のように見えた。吉永は、
「よくある手口だな。増矢もそういう調教師になっちまったか。そんな調教師ばっかりでもないけどね」
　と言って博正の肩を叩き、ふんと笑った。彼は車に戻って行きながら博正に言った。
「一部始終を和具さんに話してしまえ。あっさりケリがつくよ。オラシオンの馬主は和具さんのまで、厩舎は砂田厩舎に変わる。おそらくそういう形になるね」
　どこまで行っても、吉永ファーム早来分場の外には出なかった。なだらかな丘陵には、レッドクローバーやホワイトクローバーやチモシーや、博正の牧場にはないオーチャードとかケンタッキー・ブルーグラスなどの豊かな実りの中で、馬たちが駈け廻ったり、じゃれ合ったり、寝そべったりしていた。博正はケンタッキー・ブルーグラスもオーチャードも、やはりきちんと種をまいて自分の牧場の馬に食べさせようと思った。
「ケンタッキー・ブルーグラスは、どんな効果がありますか？」
　博正の問いに、
「馬の絨毯だな。葉緑素たっぷりの絨毯だ。これはやっぱりびっしり敷いといてやらなきゃいかん。チモシー、オーチャード、レッドクローバー、ホワイトクローバー……。みんな必要だ。それぞれ栄養素も違うし、馬は自分の体に合わせて、その日その日食べ分ける。うちの牧草は、他の牧場だって使ってるけど、中味が違うよ。草の質が違う。そうすると、土と肥料の問題ということになるわけだ。いい草を食べてる母馬から生まれた子が、いい草を食べて育つ。その反対のことを考えてみなさい。仔馬が三歳になったとき、どれだけ差がついてるか」

吉永はそう話しながら、いつのまにか国道に出、道を横切って、広いまっすぐな整地されたばかりの私道に入った。道の途中に（吉永ファーム空港分場）と書かれた板が杉の巨木に打ちつけられてあった。

「ここも、吉永さんの牧場ですか？」

「そうだよ。凄いものを見せてやろう」

「吉永さんの牧場は、いったい何町歩あるんですか？」

「早来分場が採草地も入れて三百町歩、千歳分場もだいたいおんなじ程度だな。それにこの空港分場が百町歩、白老分場も百町歩、伊達に五十町歩の採草地がある。全部合わせると幾らになるかな」

「八百五十町歩です」

博正はそう答えてから、暗澹とした気持に襲われた。うちの牧場は、放牧地と採草地を合わせても二十町歩しかない。倍に増やしたって四十町歩。そして倍に増やすためには、確かに吉永が言ったとおり、農地法の壁があり、そのうえ資金もない。いったい吉永達也はどうやってこれだけの大牧場を作りあげたのだろう。彼はまた吉永に訊いた。

「肌馬は全部で何頭いるんですか？」

「二百三十頭だね。それに私個人の所有している種馬が六頭。シンジケートの株を持ってるのが十四頭。ことしイギリスからフェアリーを買い入れるから私個人の種馬は七頭になる。それに肌馬を十二頭買った。みんな世界の名牝だ」

「フェアリー！」

博正の驚嘆の声に、吉永は微笑して頷いた。イギリスの至宝と呼ばれ、多くのクラシックレース

の勝馬を出しているボルゾフの子供の中でも、最も種馬として成功している馬であった。
「よくイギリスが手放しましたね」
「私も驚いたね。まさか手に入るとは思わなかった。しかしフェアリーを買うことで、ノーザンダンサー系だけじゃなく、プリンスリーギフト系、ボールドルーラー系という二十世紀の世界三大種牡馬系統を全部揃えたことになる。去年、フランスからフェデリコを買い入れた。これはボールドルーラー系の傑作だからね」
「……はあ」
まだ建ったばかりの真新しい厩舎の屋根が見えてきた。数人の牧童が寝藁を乾かす作業に従事し、うねりの多い放牧地には二歳馬らしい馬たちが草を食んでいる。博正には一瞥して、それら二歳馬の骨格が、自分の牧場の二歳馬よりも逞しく、動作ものびやかで活発なのを知った。車は並木に沿って走った。急な曲がり角のところで吉永は車を停めて、博正に降りるよう促した。
「これだ」
吉永の視線の向こうに、芝生の敷きつめられた幅広い長い真っすぐな道があった。博正にはそれが何であるか判らなかった。
「千五百メートルの直線コースだよ。来年から使おうと思ってる」
自分の牧場の中に、千五百メートルの調教用の直線コースを設けている生産者などいなかった。しかも芝コースを。博正は呆然と見やった。雲が太陽を一瞬覆って、いままで照り輝やいていたすべてのものが黒ずんだ。すると、周囲の木立や土の道や傍らの吉永の姿は忽然と消え、千五百メートルにわたって一直線に伸びている芝生の緑だけがぽっと浮きあがり、博正の心に迫って来た。それは博正には、ただの千五百メートルではなかった。どんなにあがいても決して歩きとおすことの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com